

# 外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(1)

北 條 礼 子\*

(平成4年4月30日受理)

## 要 旨

本研究では、1991年4月に日本人大学1年生計50名を対象に、語学学習に対して学生が感ずる不安と、教師の態度と不安の関係に関する調査を実施した。調査の結果、学生は授業中英語を話す(特にクラスメート全員の前で)ことと英語を書くことに強い不安を感じるようになった。また、教師が学生の間違いを大げさな態度で訂正せず、理解のある親しみやすい態度で学生に接すれば学生はあまり不安を感じずに英語の授業が受けられることも明らかになった。

## KEY WORDS

不安 anxiety

スピーキング speaking

英語科教育 English education

語学教育 language education

## 1. 研究の背景

### 1.1. はじめに

現在、英語教育の分野において、英語を通じて実際にコミュニケーションができる能力を育成することが重視されている。また、筆者は1990年4月英語の講義の開講時に、新入生を対象として、英語学習状況調査を実施し、学生がどのような英語の力を身につけたいと希望しているか等について調査したが、1クラス59名中38名(64.41%)の学生が、身につけたいのは「外国人とコミュニケーションする力」であると回答している。

その一方で、外国語(英語)学習のうちで、学習者が最も恐れを感じない側面がスピーキングであると考えられることから、コミュニケーション重視の最近の傾向は学生の不安を高める可能性が高いと思われる(Horwitz 他, 1986)。

外国語(英語)の学習に対して不安を感じない学生がかなり多いことは、多くの語学の教師が報告している(Horwitz 他, 1986; Young, 1990)。筆者が昨年4月に実施した、前述の英語学習状況調査の中で、大学の英語の講義に対して不安を感じないかどうかについて5段階尺度で質問したところ、59名のうち、「やや不安である」と回答した学生が24名(46.15%)、「不安である」と回答した学生が16名(30.77%)であり、計40名(76.92%)の学生が不安を感じていることが明らかになった。

---

\* 言語系教育講座

## 1.2. 不安 (anxiety) について

語学学習が成功するための情意要因として、Brown (1973) は「不安 (anxiety)」の他に、「自己知識 (self-knowledge)」、「自尊心 (self-esteem)」、「自信 (self-confidence)」をあげ、このうち「不安」が影響力の強い要因であろうと指摘した。Gardener (1985) は、語学学習における態度と動機に関する研究を行なったが、その中で、不安が語学学習を成功に導くための主要な予測要因であるという結果を示した。

ここで「不安 (anxiety)」であるが、最近の研究では単一次元的なものではなく多次的なものであり、恐怖、羞恥、内気、罪を含む複雑な情緒である、とされている (現代教育評価事典)。また、Horwitz 他 (1986, p. 123) は不安を「自律神経系の覚醒に結びついた緊張、不安、神経過敏、心配という主観的感情 (the subjective feeling of tension, apprehension, nervousness, and worry associated with an arousal of the autonomic nervous system)」という C. D. Spielberger の定義を紹介している。

## 1.3. 外国語学習の不安について

Horwitz 他 (1986) は、学生の実態観察をとおして、「外国語学習の不安 (foreign language anxiety)」を「語学学習過程の独自性に由来する語学学習に関係する自己認識、信念、感情、行動という明白な複合体 (a distinct complex of self-perceptions, beliefs, feelings, and behaviors related to classroom language learning arising from the uniqueness of the language process)」と捉らえたいとしている。

外国語学習において不安は、言語習得、記憶の保持、産出を妨げる可能性があるため、問題とされてきた (MacIntyre 他, 1991)。しかし、不安が語学学習に及ぼす影響については一貫性のある結果が得られていないのが現状である (Young, 1990)。

MacIntyre 他 (1991) によれば、これまで語学学習を含む諸分野における不安に関する研究は、3種類の観点から行なわれてきた。つまり、「特性不安 (trait anxiety)」、「状態不安 (state anxiety)」、「状況特殊不安 (situation specific anxiety)」の3種類である。特性不安とはいくつかの状況を通してみられる一般的な性格特性であり、状態不安とはある時点での情意状態であり、状況特殊不安とはある決まった一定の状況において繰り返し何度も起こる一貫性のある不安の形態である。MacIntyre 他 (1991) は、先行研究を概観し、これまで特性不安と状態不安とを扱う研究が多かったが、外国語学習の分野ではこの両観点からでは不安の構成要素を捉えることができず、また語学学習の過程における不安の役割を十分説明できないことから、第3の観点である状況特殊不安という立場からの研究が最適であると思われる、と述べている。

## 1.4. 外国語学習における話すこと (スピーキング) に対する不安

外国語学習における話すことに対する不安は、「コミュニケーション不安 (communication apprehension)」、「自尊心 (self-esteem)」、「社会的不安 (social anxiety)」のような複雑な心理的構成要因から成り立っているであろう、と Young (1990) は述べている。Young は McCroskey の定義を用いて「他人との実際のあるいは予想されるオーラル・コミュニケーションに結びついている個人の恐怖感あるいは不安の程度 (an individual's level of fear or anxiety associated with either real or anticipated oral communication with another person and persons)」とコミュニケーション不安を定義し、社会的不安については、Leary の定義を引用

し、「実際あるいは仮想の社会場面における個人間評価についての予想あるいは存在(the prospect or presence of interpersonal evaluation in real or imagined social settings)」と定義している。Young はさらに、社会不安に含まれる概念として「スピーチ不安 (speech anxiety)」、 「恥かしさ (shyness)」、 「当惑 (embarrassment)」、 「社会的評価不安 (social-evaluative anxiety)」などをあげている (Young, 1990, p. 540-541)。

Young (1990) は、外国語の授業において学習者の不安を引き起こすスピーキングを中心とした活動を、5段階尺度を用いて、より体系的に調査した。同時に学生が不安感を抱かずに済む教師側の姿勢についても調査した。その結果、クラスメートの注目を浴びた状態で、あるいはクラスメート全員の前で、学習中の言語を話すという学習活動に対して学生が最も強い不安を感じることに、しかし教師が厳しくない態度で学生の誤りを訂正したり、友好的でリラックスした態度で学生に接すれば、学生はそれほど不安を感じずに済むことがわかった。この人前で話す不安については詳しく検討されていないが、言語不安の概念的モデルを構築するにあたり、言語不安の構成概念を理解する上で有効であろう、と結論づけている。

### 1.5. 日本人学習者の外国語学習に対する不安の研究について

Horwitz 他 (1986) は、語学教師は不安傾向の高い学習者に対処する際の提案として、①不安を引き起こす状況に対応する方法を学習者が学ぶ手助けをする、②ストレスがより低い学習内容にする、という2種類の方法があるが、実行に移す以前に学習者が実際に不安を感じているかどうかを明らかにすることが必須であるとしている。

さらに、Horwitz 他は、外国語学習において学生が不安を感じていても、学生の不安の実態を教師が理解し、学生を励ますことができれば、学生の不安はある程度まで低くすることが可能である、とも示唆している。

日本では、外国語（英語）学習における不安に関する体系的な研究が多いとはいえない。日本人学生を対象とした場合、学生がどのような不安をどの程度感じているのかについて知ることが学生が感じる不安に関する研究の第1歩として必須のことであると考えられる。この場合、現在コミュニカティブ・コンピタンス重視の教育が注目され、学生は英語を話すことに特に不安を感じている、という先行研究の結果から、特にスピーキングと不安との関係を中心に検討してみることは重要であろう。また、学生の不安を減ずるのに効果的な教師の態度、性格等も調べることは十分に意義があると思われる。

## 2. 研究の目的

本研究では、英語の授業中に日本人大学1年生が感じる不安を学生の観点から明らかにすることを主な目的としている。また、教師がどのように学生に接すれば、学生が外国語（英語）の授業で感じる不安が少しでも低くなるのかを調べることを第2、第3の目的としている。

具体的には、

- ①学生はどのような学習活動に対してどの程度不安を感じるのか、
- ②学生は教師が学生の誤りをどのように訂正すると不安を感じるのか、
- ③学生が不安をなるべく感じずにすむには、教師がどのような性格であれば、あるいは態

度で学生に接すればよいのか  
の3点を明らかにするのが本研究の目的である。

なお、本研究では「不安」を前述の Horwitz (1986) による「外国語学習の不安」定義の範囲で捉え、状況特殊不安の観点から不安を考えていくこととする。

### 3. 研究の方法

3.1 被験者：本学1年生1クラス50名（男子27名，女子23名）

3.2 測定具：Young (1990) が開発したアンケートを基に、筆者が日本人学習者が被験者であることを念頭に若干の修正を加えたアンケート。このアンケートは以下の4部から成っている。

1部：被験者のこれまでの英語学習状況や、海外経験について質問する項目。

2部：英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目

3部：英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感ずる不安の関係に関する5項目。

4部：学生が授業で感ずる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目  
なお、3部と4部は、Young (1990) が自由回答形式で集めた結果を基に、筆者が5段階評定の形式に改めたものを用いた。

3.3 実験実施時期：1991年4月

3.4 手続き：約15分の実施時間で、集団で調査を行った。記入は匿名として、2部から4部の内容に関する記述を提示した。回答は、「1：全く不安を感じない，2：あまり不安を感じない，3：どちらでもない，4：やや不安を感じる，5：非常に不安を感じる」の5段階であり，1点から5点までの得点化を行なって，項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：クラスカル・ウォリスの検定

### 4. 研究の結果

4.1. アンケートの第1部の結果、海外経験ありと回答した学生2名を調査対象から除外した。

4.2. 第2部：英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目について

4.2.1. 平均値・標準偏差

アンケートの第2部である、英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目に対する得点を集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表1である。

英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目の得点について、クラスカル・ウォリスの検定の結果、まず  $\chi^2(19) = 250.82$  であり、1%レベルで有意であった。引き続き、20項目

表1：英語の英語の授業において学生が感ずる不安に関する20項目の平均値と標準偏差

順位		平均値	標準偏差
①	授業中、皆の前で英語で話す	4.20	0.94
②	準備してきた英会話を、授業中に全員の前で発表する	4.10	0.94
③	授業中、英語で意見を発表したり寸劇を演じる	4.08	1.02
④	授業中、皆の前で、与えられた状況での役割を自発的に演ずる	4.02	0.93
⑤	英語による質問を聞いて、その答えを英語で書く	3.88	0.91
⑥	教師の言ったことを一人だけで(全員ででなく)繰り返す	3.84	0.84
⑦	授業中、英作文を書く	3.70	1.10
⑧	英語によるディスカッションに自主的に(強制的義務的にでなく)参加する	3.68	1.03
⑨ <sup>a</sup>	答えを黒板に書く	3.62	0.89
⑨ <sup>b</sup>	2人1組になってお互いに英語で質問し合う	3.62	1.06
⑩	家で英作文を書いてくる	3.42	1.00
⑫	2人1組になって、短い英会話を考えて作る	3.22	1.06
⑬	教科書の練習問題をやる	3.20	1.00
⑭	教師の研究室で個人的に教師と話す	3.14	1.20
⑮	新聞や写真を参考にしながら英語の勉強をする	2.90	1.20
⑯	3～4人のグループで練習する	2.84	1.03
⑰	教師の後について繰り返す	2.54	1.08
⑱	授業中、グループに別れてゲームをし勝敗を競う	2.52	1.06
⑲	授業中、英文を黙読する	2.34	1.11
⑳	授業中、英文を音読する(全員で)	2.22	1.17

のうちどの項目間に有意差があるのかを検定したが、その結果は表2のとおりである。なお、表2は理解しやすいように、全項目を得点の高い順（学生の感じる不安が強い順）に並べているが、表2の項目番号と内容は表1に対応している。

表1、2より、項目①の「授業中、皆の前で英語で話す」から項目⑭の「教師の研究室で個人的に教師と話す」までの間には有意差はみられなかった。また、項目⑩の「家で英作文を書いてくる」から項目⑳「授業中、英文を音読する（全員で）」間にも有意差はなかった。

#### 4.3. 第3部：英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目。

##### 4.3.1. 平均値・標準偏差

アンケートの第3部である、英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目に対する得点を集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表3である。

##### 4.3.2. クラスカル・ウォリスの検定結果（5項目）

英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する5項目の得点について、クラスカル・ウォリスの検定の結果、まず $\chi^2(4)=91.52$ であり、1%レベルで有意であった。引き続き、5項目のうちどの項目間に有意差があるのかを検定したが、その

表 2 : クラスカル・ウォリスの検定結果(20項目)

1																			
2																			
3																			
4																			
5																			
6																			
7																			
8																			
9																			
10																			
11																			
12																			
13																			
14																			
15	*																		
16	*	*	+																
17	**	**	**	**	+	+													
18	**	**	**	**	*	+													
19	**	**	**	**	**	**	+												
20	**	**	**	**	**	**	*	*	+	*									

\*\* p<.01, \* p<.05, + .1<p<.05

表 3 : 英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係に関する 5 項目の平均値と標準偏差

順位		平均値	標準偏差
①	あなたが間違うと、教師はあなたが愚かであると思わせる態度を取る	4.34	0.97
②	教師が厳しい態度で間違いを訂正する	4.18	1.07
③	教師が、学生の間違いにたいして大げさな反応を示す	4.10	0.96
④	教師が、学生が間違ってもそれはたいしたことではない、という態度をとる	2.68	1.19
⑤	教師が、間違いはだれでも犯すものである、という態度を取る	2.52	1.02

表 4 : クラスカル・ウォリスの検定結果(5項目)

1				
2				
3				
4	**	**	**	
5	**	**	**	

\*\* p<.01, \* p<.05, + .1<p<.05

結果は表4のとおりである。なお、表4は理解がしやすいように、全項目を得点の高い順（学生の感じる不安が強い順）に並べているが、表4の項目番号と内容は表3に対応している。

表3, 4をみると、項目①の「あなたが間違うと、教師はあなたが愚かであると思わせる態度を取る」、項目②の「教師が厳しい態度で間違いを訂正する」、項目③の「教師が、学生の間違いに対して大げさな反応を示す」の3項目と、項目④の「教師が、学生が間違ってもそれはたいしたことはない、という態度を取る」と項目⑤の「教師が、間違いはだれでも犯すものである、という態度を取る」の2項目間に有意差があり、項目①, ②, ③の3項目は、項目④, ⑤の2項目より、有意に学生の不安感を高めることがわかった。

#### 4.4. 4部：学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目について

##### 4.4.1. 平均値・標準偏差

アンケートの第4部である、学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目に対する得点を集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表5である。

##### 4.4.2. クラスカル・ウォリスの検定結果（13項目）

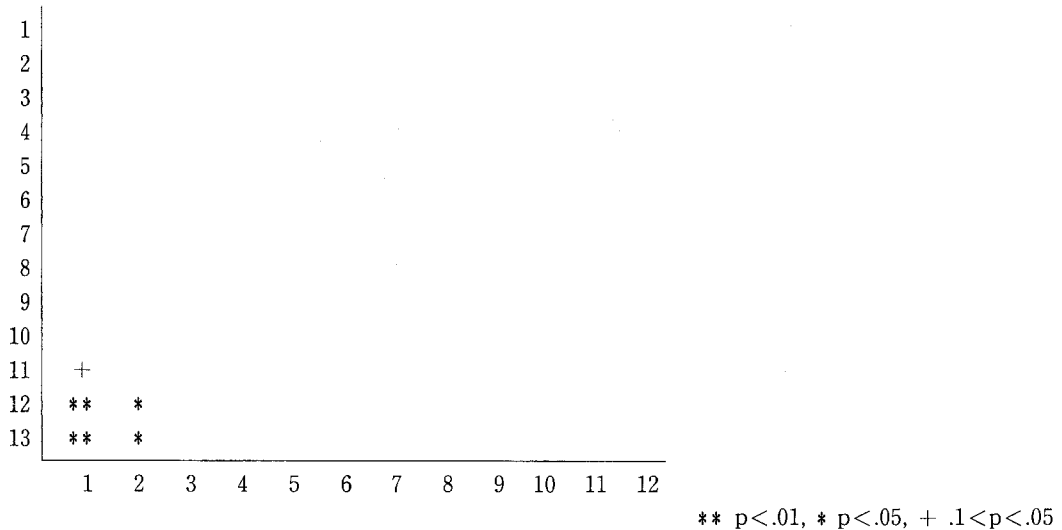
学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目の得点について、クラスカル・ウォリスの検定の結果、まず $\chi^2(12)=66.90$ であり、1%レベルで有意であった。引き続き、13項目のうちどの項目間に有意差があるかを検定したが、その結果は表6のとおりである。なお、表6は理解しやすくするため、全項目を得点の高い順（学生の感じる不安が強い順）に並べているが、表6の項目番号と内容は表5に対応している。

表5, 6をみると、項目①から項目⑩までは有意差がなかった。項目①の「(授業中)学生に英語で発言するように励ます」と項目②の「学生をほめる」の2項目と、項目⑫の「親しみやすい」、項目⑬の「理解のある」の2項目との間に有意差がみられた。このことから、学生は教

表5：学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係に関する13項目の平均値と標準偏差

順位		平均値	標準偏差
①	(授業中)学生に英語で発言するように励ます	2.72	1.01
②	学生をほめる	2.54	1.00
③	忍耐強い	2.34	0.84
④	教材について十分説明する	2.22	1.05
⑤	いつも笑顔で学生に接する	2.06	0.95
⑥	学生を緊張させない	2.00	0.98
⑦	面倒みのよい	1.98	0.79
⑧	(教師の態度が)緊張しないでリラックスしている	1.96	0.82
⑨	助けてくれる	1.92	0.94
⑩	ユーモアのセンスに富む	1.88	0.82
⑪	堅苦しくないリラックスした雰囲気を作る	1.86	0.80
⑫	親しみやすい	1.72	0.96
⑬	理解のある	1.68	0.88

表 6 : クラスカル・ウォリスの検定結果(13項目)



師が理解があって親しみやすい方が、英語で発言するように励まされたりほめられたりするより不安を感じないことが明らかになった。

## 5. 考 察

### 5.1. 英語の授業において学生が感ずる不安について

研究の結果から、第一に、授業中皆の前で英語で話したり、準備してきた英会話を授業中に全員の前で発表したり、英語で意見を発表したり、順劇を演じることに對して、学生は強い不安感を抱く反面、3～4人のグループで練習したり、教師の後について繰り返したり、グループにわかれてゲームをし勝敗を競ったり、英文を黙読したり、全員で英文を音読したりするという、個人的に目立たない学習活動の方があまり不安を感じないことが明らかになった。

次に、学生が不安を感じずる項目のうち、①、②、③、④、⑥、⑧、⑨<sup>b</sup>は、「英語で話す」ということについての不安であり、前もって話す内容を準備してきた場合であっても、強制的ではなく自発的に英語で話す場合であっても、さらに学生同志2人1組になって英語で質問し合う場合でも学生が強い不安を感じていることがわかる。この結果は、クラスメートの注目を浴びた状態で、あるいはクラスメート全員の前で、学習中の言語を話すという学習活動に對して学生が最も強い不安を感じたという、Young (1990)の研究結果に一致するものであった。しかし、Youngの調査では、前もって準備をしていれば学生の不安感は低くなるという結果が得られたが、本研究においては、準備の如何にかかわらず不安感が強い点が異なっている。

また、項目⑤、⑦、⑨<sup>a</sup>、⑩に共通するのは「英語を書く」ということである。英語を書く場合でも、授業中であれ、家で前もって書いてくる場合であっても、学生はかなり強い不安を感じている。



さらに、学生は、項目⑫の2人1組になって短い英会話を考えて作ったり、⑬教科書の練習問題をすることにもかなりの不安感を抱いている。

以上、学生が不安を感じるのは英語を話したり書いたりするという生産的な学習活動においてであることが明らかになった。ただし、生産的な学習活動のうち、グループに別れてゲームをし勝敗を競うことに対して学生は不安を感じていないのが、特徴的である。この理由として、グループ内での活動のため、個人的に他の注目を浴びる心配がないということが考えられる。

以上の結果は、MacIntyre 他 (1991) が提唱している、外国語学習における不安の発達と持続に関するモデルを支持する結果であると考えられる。つまり、数年間の外国語学習を経た学習者は、語学学習に対して、情緒・態度という特殊状況不安を形成し、それまでの学習経験が否定的なものであれば、不安感が生じそのまま持続し常に存在するものとなる、というのである。本研究の被験者はどちらかといえば英語は得意ではないと推定されるが、筆者が実施した前述の英語学習調査において英語の学習全般に対して約77%の学生が不安を感じていることから、英語学習に対して学生が常に不安を示す傾向がある、と思われる。

## 5.2. 英語の授業中教師が学生の誤ちを訂正する際の態度と学生が感じる不安の関係について

研究の結果から、教師が学生の間違いを訂正する場合、教師が学生が愚かであると思わせる態度を取ったり、厳しい態度で間違いを訂正したり、大げさな反応を示すと、学生は強い不安を感じるようになった。また、教師が学生が間違ってもそれはたいしたことではないという態度を取ったり、教師が、間違いはだれでも犯すものであるという態度を取れば、学生の不安感が低くなることもわかった。この結果は常識で考えても納得できる結果であると考えられる。Young (1990) の調査でも、教師が学生の間違いを大げさにとらえなければ、学生の不安感が低くなるという結果が得られており、本研究は同様の結果を得たといえよう。

## 5.3. 学生が授業で感じる不安と教師の態度、性格との関係について

研究の結果から、教師の態度・性格が親しみやすく理解があれば学生は不安をあまり感じないですむが、授業中英語で発言するように励ましたりほめられると不安を感じるようになった。Young (1991) は、自由回答によりデータを収集し、結果をパーセントのみで提示しているが、教師が親しみやすく、ユーモアのセンスに富み、忍耐強く、緊張しないリラックスした態度を示すと、学生があまり不安を感じないという結果であった。

Youngの結果では、授業中英語で発言するように励まされたりほめられたりすることを肯定的に捉えていたが、日本人学生は教師に励まされたとしてもそれはどちらかという不安に連がり、とにかく英語を話すことに抵抗感を抱いていると推測される。また、これまで、あまり教師にほめられる経験がなかったためかどうかは明らかではないが、教師にほめられるとあって不安感を抱いてしまう姿が浮かぶ。さらに、日本人学生は教師にユーモアのセンス、忍耐強さをあまり期待していないともいえるのではなからうか。

## 6. 今後の課題

今回の研究は、日本人大学生が感じる外国語（英語）の授業に対して感じる不安に関する体

系的な研究を目指し、その第1歩として行なったものである。今回は大学1年生50名を対象としたが、今回の結果を参考にした上で、より多くの調査人数を対象とし、より体系的に学生の抱く不安感を捉えていきたい。調査の対象も大学生ばかりでなく英語の初習者である中学生、高校生にも拡張し、外国語（英語）学習に対する不安についてその実態を調べたい。

また、今回は、英語の授業で普通行なわれている学習活動についての不安を調査した。しかし、将来的に、スピーキングに対する不安を構成しているといわれている「コミュニケーション不安」、「自尊心」、「社会的不安」についても、この3種の構成要因が日本人学習者の抱く不安の構成要因として抽出できるかどうかについて明らかにしていきたい。

#### 引用・参考文献

- 東 洋他編 (1988) 「現代教育評価事典」 金子書房
- Birkmaier, Emma M. (1973) "Research on Teaching Foreign Languages," *Second Handbook of Research on Teaching* (Ed. by R. M. W. Travers) Rand McNally & Company, 1280-1302.
- Carroll, John B. (1963) "Research on Teaching Foreign Languages," *Handbook of Research on Teaching* (Ed. by N. L. Gage) Rand McNally & Company, 1060-1100.
- Chastin, Kenneth (1975) "Affective and Ability Factors in Second-Language Acquisition," *Language Learning*, Vol. 25, No. 1, 153-161.
- Ely, Christopher M. (1986) "An Analysis of Discomfort, Risktaking, Sociability, and Motivation in the L2 Classroom," *Language Learning*, Vol. 36, No. 1, 1-25.
- Foss, Karen A. and A. C. Reitzel (1988) "A Relational Model for Managing Second Language Anxiety," *TESOL Quarterly*, Vol. 22, No. 3, 437-454.
- Horwitz, Elaine K. (1985) "Using Student Beliefs about Language Learning and Teaching in the Foreign Methods Course," *Foreign Language Annals*, Vol. 18, No. 4, 333-340.
- \_\_\_\_\_, M. B. Horwitz and J. Cope (1986) "The Foreign Language Classroom Anxiety," *Modern Language Journal*, Vol. 70, No. ii, 125-132.
- \_\_\_\_\_ (1988) "Beliefs about Language Learning of Beginning University Foreign Language Students," *Modern Language Journal*, Vol. 72, No. iii, 283-294.
- Kleinmann, Howard H. (1977) "Avoidance Behavior in Adult Second Language Acquisition," *Language Learning*, Vol. 27, No. 1, 93-107.
- McCoy, Ineborg R. (1979) "Means to Overcome the Anxieties of Second Language Learners," *Foreign Language Annals*, Vol. 12, No. 3, 185-189.
- MacIntyre, Peter D. and R. C. Gardner (1989) "Anxiety and Second-Language Learning: Toward a Theoretical Clarification," *Language Learning*, Vol. 38, No. 2, 251-275.
- \_\_\_\_\_ (1991a) "Investigating Language Class Anxiety Using the Focused Essay Technique," *Modern Language Journal*, Vol. 75, No. iii, 297-304.
- \_\_\_\_\_ (1991b) "Methods and Results in the Study of Anxiety and Language Learning: A Review of the Literature," *Language Learning*, Vol.

- 41, No. 1, 85-117.
- \_\_\_\_\_ (1991c) "Language Anxiety: Its Relationship to Other Anxieties and to Processing in Native and Second Language," *Language Learning*, Vol. 41, No. 2, 513-534.
- Scovel, Thomas (1978) "The Effect of Affect on Foreign Language Learning: A Review of the Anxiety Research," *Language Learning*, Vol. 28, No. 1, 129-142.
- \_\_\_\_\_ (1986) "The Relationship between Anxiety and Foreign Language Oral Proficiency Ratings," *Foreign Language Annals*, Vol. 19, No. 5, 439-445.
- Steinberg, Faith S. and E. K. Horwitz (1986) "The Effect of Induced Anxiety on the Denotative and Interpretive Content of Second Language Speech," *TESOL Quarterly*, Vol. 20, No. 1, 131-136.
- Young, Dolly J. (1990) "An Investigation of Students' Perspectives on Anxiety and Speaking," *Foreign Language Annals*, Vol. 23, No. 6, 539-553.
- \_\_\_\_\_ (1991) "Creating a Low-Anxiety Classroom Environment: What Does Language Anxiety Research Suggest?" *Modern Language Journal*, Vol. 75, No. iv, 426-437.

## A Study of Students' Anxiety over Classroom English (1)

Reiko HOJO\*

### ABSTRACT

The purposes of this study are 1) to find out how much anxiety students have in English classes; 2) how teachers can correct students' errors so that students feel less anxious and 3) what kinds of characteristics and attitudes students expect teachers to have so that students feel less anxious.

Data was gathered from 50 Japanese university freshmen, using a questionnaire; the questionnaire was administered in April of 1991. Data was analyzed by the Kruskal-Wallis and the Scheffé's tests.

The results revealed that 1) students felt most anxious when they spoke English, especially when speaking in front of their peers; 2) students felt less anxious when teachers have an attitude that mistakes are "no big deal" and 3) students felt less anxious when teachers were understanding and friendly.

---

\* Division of Languages : Department of Foreign Languages